



ハタラクヒト

*ペディア 2

<鈴木浩氏>

田中永子

はじめに

はじめまして、田中コーチングの田中永子と申します。

私はNLPやコーチング、ソースなどを学び、それらのノウハウや考え方を活かしたコーチングを提供しております。

この度、新しい企画といたしまして、おもに愛知県名古屋市、刈谷市を中心にお仕事をしていらっしゃる経営者の方々や企業や組織の幹部の方々へのインタビュー企画をスタートいたしました。

この企画を始めようと思った趣旨は、将来の先行きが見えづらい現代社会において、第一線でバリバリと働いていらっしゃる現役の経営者の方々、企業幹部の方々が、今何を考えているかということに興味を持ったこと。そして、その考え方に基づいてどんなアクションを起こしていらっしゃるのだろうと思ったことにあります。

また、こうした第一線でご活躍の方々のさまざまな角度からのメッセージを他の多くの実業家の方々と共有したいと思ったことも大きなモチベーションとなっています。

その他、高校生や大学生の方、これから社会に入っていこうとする方にも読みやすいように心配りしておりますので、ぜひご愛読をいただけましたら幸いです。

個人的な考えではありますが、愛知県はモノづくりの聖地であると考えております。このモノづくりの聖地である愛知県にあって、日夜、しのぎを削っていらっしゃる多くの企業人、組織人の生の声をお届けしたいと思っております。

よって、このサイトの大きな特徴として、インタビュー形式のログをそのまま読者のみなさまにお届けするというスタイルを取っています。インタビューさせていただく私と、インタビューを受けてくださる方の真剣勝負。行間の中に潜む間も大切なメッセージだと考えております。

実はスナフキン？・・・家業はクリーニング屋さん 鈴木浩氏

ご登場いただくのは 白星舎の 鈴木浩さんです。

鈴木さんは、刈谷市商工会議所に在籍され、
現在白星舎にて、クリーニング・サービスをご提供されています。

今日はお仕事についてはもちろん、
ご趣味などについてもお話を伺ってみました。

鈴木浩さん



おもにクリーニング及び
クリーニングの宅配サービスとクレンリネス事業を提供しており、
会社のモットーは誠実。

趣味はアウトドア。
休日は山へ、海へ、おんぼろキャンピングカーを駆って
日本各地のキャンプ場や温泉に出没する。
好きな本は北方謙三の時代小説と池波正太郎の作品。
好きな音楽はQEEN。

連絡先：白星舎

電話番号：0566-21-3035

メール：1000ta98hiro@gmail.com

◆ 私にとってクリーニング屋はまさに家業

田中永子（以下、田中）： さて、鈴木さんは刈谷市でクリーニング屋さんを営んでいらっしゃいますが、どうしてクリーニング屋さんを始められたんですか？

鈴木浩さん（以下、敬称略）： 元々、実家がクリーニング屋だったから。

田中： 昔から。

鈴木： そうそうそう。昭和36年からやっとなるじゃんね、あの場所で。もうね、子どもの頃から。土日もないようにやってるじゃん。仕事と生活が一緒だから。仕事が職業じゃないんだよね、もう。家業になってるんだよね。クリーニングっていうのが。だから、まさに一家の、生業（なりわい）だよね。

田中： へえ。

鈴木： 以前は違う仕事してて。

田中： 何をされてたんですか？

鈴木： 業種で言うと、販売なんだけど。骨董とか美術品みたいな、主にお茶道具をメインに扱っている会社にいたの。

田中： すごい。

鈴木： で、それを小売りもしてるんだけど、そこそこの規模の会社で従業員は100人位いたかな。東京に支店があって。メインは卸じゃんね。だから全国のお茶道具を扱っているお店に卸す仕事をしてて。ぼくは入った当時は東海三県の担当をもらって、車でくるくるルートセールスしてて。といっても、ほとんどお客さん決まっちゃってるから配達だよね。御用聞きをして配達をしてて。途中で部署が変わって、東北と北海道を担当するようになって。

田中： 北海道。

鈴木： うん。で、月に一回出張ということで、注文を取ったり、集金したりな感じだったな。

田中： へえ〜。

鈴木： で、それを平成3年までやったのかな。父親が8年くらい入退院を繰り返しとって、平成3年に亡くなったんだけど。まあ、会社をどうしようかって話になって。クリーニング屋をやるつもり、まったくなかったんだけどね。仕事おもしろかったし、給料もよかったし。同族の株式会社だったんだけど、税金払うなら従業員に払っちゃえみたいな会社で。だけど、そのうちもらった給料やボーナスを一定期間会社に貸し付けしないといけないという形で、くれるわけ。そうすると、会社も運転資金で使えるじゃん。でも順繰りでくるから、ボーナスとか立つくらいもらえるんだわ。

田中： すごい。

鈴木： だから、当時どうだろう……20代で年間かなりもらってた。同世代の二倍も三倍ももらってたからさ。会社辞めるころには、1200~300はもらってたけど、今はもう見る影もなく（笑）まあ、そんなあったんだけど、父親が亡くなった時、クリーニング屋さんやめようかって話があってね。クリーニング屋さんって、資格いるじゃんね。「クリーニング師」という国家資格があって、それ持ってる人がいないとクリーニング屋さんできないの。一応国家資格だから、学科もあるけど実技もある。アイロンかけるとか。でも、ぼくやったことないから会社が終わってから名古屋にあるクリーニング学校に行って、クリーニング師の資格は持ってた。

田中： へえー。すごい。

鈴木： それで、やっぱり、クリーニング屋さん、どうしようかなって。親戚一同近くに来て、うち本家だからお正月とかみんな集まってるわけ。そうすると「おまえ、大きくなったらクリーニング屋継ぐんだ」って。こう、すり込まれてるわけ、早い話が。

田中： 笑

鈴木： そうすると、う〜ん。でも、クリーニング屋さんって大変なんだわ、見てると。じゃあ「このまま、なくしてしまう方がいいのか？」 「もし、やるとしたら、誰がやるのか？」ってことで。ぼくか、妹か、弟かっていうと「やっぱ俺がやるしかないのかな」と……長男だし……この大変なことやれるやつは。弟じゃ無理だろうなと思ってて。まあ、そういう流れの中で、ぼくがやるって方向で、始めたんだわ、会社辞めて。

田中： それはお父さまのためだけとかではない感じですよ。

鈴木： う〜ん。たぶん幼いころからそういうふうで育ったから。その環境にきたら「もうやらざるをえんな」という、もう逃げようがないってことなんじゃないかな。

田中： 自分の中で、意識はしていなかったけど。

鈴木： そう。長男ってそういうものなんだよ。「俺がやらなきゃいかんだろ」っていう意識が強いじゃんね、やっぱり。だから必然だよ。で、それで後悔してるかどうかっていうと、難しいなあ。あのまま会社に勤めてたら楽だよ。そこそこ給料もらって気は楽だよ。こんなに苦労しないし、嫁さんとケンカしなくていいし（笑）でも、それはそれだけの世界だよ。自分が仕事するようになってみて、やっぱり自営なわけじゃん。となると、自営の付き合いって違うなってことがあって。やっぱサラリーマンだったら、つまらんかったらと思う。

田中： どんなふうに違って来るんですか？

鈴木： う〜ん。商工会議所青年部ってことや、あと地域にいるわけなので。前だったら朝早くから夜遅くまで会社に行ってる、地域ってものがないじゃん。

田中： うんうん。

鈴木： だから、地域にいるといろんな付き合いが出てくるじゃんね。これはサラリーマンでも近くに勤めとったらそうだったかもしれんけどさ、たとえば P T A の役が来たりとか。

田中： 来ますね。

鈴木： 嫌いじゃないもんで、会を作ってみたりとか（笑）。そうするといろんなつながりができたりだとか。昔からそうなんだけど、飲む時は自分がどういう人物かを明らかにして飲むのが、ぼく基本だもんで。飲んで「クリーニング屋やってるんで、よろしくね」くらいの話をしてくるじゃん。

田中： うんうん。

鈴木： 自分の人となりを一応。どこで仕事がつながるかわからんもんね。サラリーマンって、そこ考えないじゃん。特に思うのは、今、モノでなにがいいのか、悪いのか、誰もわからんじゃん。そのモノにどういう価値があるのかって、すごくわかりにくい時代だと思うじゃんね。

田中： うんうん。

鈴木： そうすると「結局そこに行くには、何でいくの？」っていう話になる。

田中： 本物を見極めるために？

鈴木： 見極めるってわけじゃないんだけど、例えば「今日は中華が食べたいな。どこに行こう？」ってなった時、三軒お店がある。一軒は知り合いの店、あと二軒は知らない店だとしたら、どこいく？

田中： だったら、知ってるお店かな。

鈴木： でしょ。となると、まずその人があって、次にものがある。そこがあるから、ぼくはなるべく自分はオープンにしてるじゃんね。入口を広く、知ってもらおう。

田中： まず、人となりを。

鈴木： そうそうそう。

田中： 自分が何をやってる人かということをはっきりとすることで、つながっていくという。

鈴木： うんうん、そう。格好つけるんじゃないで、自分にあう人が付き合ってくれればいい。それで仕事につながって食っていければいいなと思ってるからさ。まあ、そんな感じなのかな、日々が。まあ、だから、結構やらんでもいいようなことやったりとかさ。

田中： あはは。

鈴木： それが嫌いじゃないから、やっちゃうんだよね～（笑） いろんなことをね。

田中： なんかね、鈴木さん、すごくお世話好きっていうか。

鈴木： うんうんうん。

田中： すごく自然にそれをされてる感じがします。

．．．．． つづく ^^

◆人生60年で生きるというスタイル

鈴木： でもね、あんまりそればかりやっていると、お金儲からないんだよね。

田中： そうですか？

鈴木： うん、でもお金ってあって困るものじゃないけどさ、あんまりガツガツガツガツ仕事してさ、朝から晩まで仕事してお金があって……っていうのは好きじゃないね。

田中： うん。

鈴木： 逃げとか、言い訳かもしれないけども……。その向こうに働かんでもいいようになる世界があるとかいうサクセス・ストーリーがあるじゃん。それはね、あんま好きじゃないんだよね。

田中： 言葉は違うかもしれないけど、生涯現役みたいな。働いていたいとか。

鈴木： と いうよりも……今ね、遊びたいものがあると、ついついそっち行っちゃうわけよ（笑）

田中： 笑

鈴木： うん、うちの親父がね、58歳で死んだるじゃんね。

田中： うん。

鈴木： おじさんも60歳で。うちの家系って、すごい早死になんだわ。親父の妹も60歳ちょっとで死んだるし。

田中： お若いですねえ。

鈴木： うん。そうするとさ、あんまり長生きできんとか、実は思ってた。

田中： あははは。

鈴木： いや、ほんとの話。ぼくね、むかしすごく消極的な人間だったんだわ。

田中： そうなんですか？

鈴木： ものごとに対して、できれば避けて通りたいとか、嫌なことは絶対にやりたくないとかね。いわば、ちょっとヲタクっぽい。今でいう、引きこもりに近い感じ。

田中： うん。

鈴木： 中学の時ってクラブ活動は必須だったでしょう？

田中： ええ。

鈴木： でも、馴染めなくて途中でやめちゃうし、学校もあんまり行かなかった。というか、朝行くんだけど、そのままどっか行っちゃう。すごくお世話になった先生がいるんだけど、ぼくがすぐいなくなっちゃうから、その先生が朝迎えに来てくれて（笑） で、一緒に学校にっていうくらい。そんな感じ。

田中： なんか、逃げてる感じ？

鈴木： そうそう、逃げてる。ちょっと不思議くんだったかもしれんね、今思うと。朝「今日天気いいなあ」とか言って、学校行くつもりで家を出るじゃん。で、「あの雲どこいくのかなあ（笑）」

田中： あはははは。

鈴木： 「どっから来るのかなあ？ あの雲の来るところ、行ってみようかなあ」って、そのままどっか行っちゃうっていうようなね。もう大騒ぎだよな。

田中： 実際、いなくなっちゃってたんですか？

鈴木： うん。まあ、二回ぐらいは。

田中： それっていくつぐらいの時ですか？

鈴木： 中学生ぐらいの時。

田中： じゃあ、義務教育の最中ですね。

鈴木： そうそう。で、高校生の時もかなり、いろいろ屈折して。

田中： どんなふうにな？ 盗んだバイクで走りだしちゃったとか（笑）？

鈴木： いや、盗んだバイクじゃないけど（笑） まあ、中二病まんま来たって感じだね、今でいう。

田中： わかります（笑）

鈴木： ひどい……子だったね（笑）。それがあったんだけど。ぼく、29歳と6ヶ月の時に結婚したんだけど、30歳になりました。その時、ふと思ったのが「あれ、俺の人生半分来たな」って。親父58でしょ。おじさん60でしょ。そうすると、もうあと半分じゃん、その計算でいくと。となると、毎年海に行ってるのも「あと30回で終わり？」とか。そう思い始めたら「このままじゃ、いかん。やれること、やろう」と思って。AかBかを迷ったら、やれる可能性があって、合理的な理由があるんだったら、とにかくやってみよう。その時、決めたのよ。

田中： その時、スイッチが入った感じですか？

鈴木： 入ったというか……。

田中： 切り替わった？

鈴木： そう。やりたいことは、やっとうこうかなって思って。で、それから、だいぶ変わったね。うん。仕事に執着しなくなった、全然。お金に執着しなくなったのかな。うん。必要なことはお金いるんだけど。よく近所のPTAのお母さんたちに「鈴木さんって、お金を使わずに遊ぶの上手なんですね」っていわれて（笑）

田中： （笑）それ、すごい褒め言葉だと思います。

鈴木： うん、そう。そんな感じ。

田中： その30歳の時って、お仕事は？

鈴木： クリーニング屋になって、すぐだね。

田中： むりやり、そうしたわけじゃなくて、ごく自然にそうなった感じですね。

鈴木： うん。自然にそういう考えに行き着いた。30歳ってちょうど折り返しだなって。あと

、10年。ヤバイよ、俺（笑）

田中： どうなんでしょう？ 結構、自分で自分を限っちゃうっていう部分もあるのかなという気がして。

鈴木： うん。実際さ、あとどれだけ生きるかわからない人間なんて、途中で事故で死ぬこともあるかもだし。でも、なんとなく自分の中で60歳ってひとつのラインみたいな気が、すごいしてて、昔から。「60歳かあ。信長の時代は人生50年だから、プラス10年だな」とか。

田中： じゃあ、ご自分で考えてらっしゃる、60歳というボーダーを超えたら、もうまんべんなく自由になる感じですね。

鈴木： うん。もう後は、あれだよな。もう、起きたきり老人だね（笑）。

田中： あはははは。どこ行っちゃうんだ、みたいな（笑）。

鈴木： （笑） もう、ここまで来たら、後は俺の自由だ一くらいの（笑）。

田中： なんか、よりパワフルになる感じですね。

鈴木： 元々、どっちかというと、土地とか場所とか執着しないタイプだから。できれば、旅をして旅を続けたいっていうね。

田中： その、人生の旅、みたいな？

鈴木： 60歳とか、こんな年寄りを使ってくれるところがあれば、パートでもしながら、あちこち日本全国のハローワークで。

田中： あははは。おもしろい。

鈴木： 日本中のハローワークに登録しなきゃ（笑）

田中： え？ 家業はどうするんですか？

鈴木： 家業は60歳になったら、もういいでしょ。

田中： もう譲っちゃう感じ？

鈴木： 譲るか、畳んでもいいし。

田中： あー、そっか。60歳っていうのを、ほんとに節目として考えてらっしゃる。

鈴木： そうそう。別に続けてもいいし。その時、刈谷にいて、どんな人とどんなつながりを持っているかによって変わってくる。楽しく過ごせる人達とつながっていれば、もう少しいるかもしれないし（笑）

田中： （笑） いなかったら、ハローワーク行って、全国まわるかな、みたいな。

鈴木： そうそうそう。

田中： それはひとりでまわるんですか？

鈴木： う〜ん。むつかしいなあ。子どもとか、大きくなってくるじゃん。どんどん手が離れていく。先日、知り合いが開店したお店に出かけて帰ってきたら、奥さんが「長生きしてね。淋しくなっちゃうから。子どもたちも育ていっちゃうし」っていうの。ぼくはもう「自分ひとりで自由になりたい」とか逆に思っちゃうんだよね。

田中： どんどん身軽になる感じですね。

鈴木： うん。別にその時に奥さんがいていいんだけど、もっと気楽に生きたい。なんかね、当然気も使うんだけど「ずっと面倒みなきゃいけないの？」と思うと、ちょっと重いところもあってさ。毎日じゃなくてもいいかなと。お互いのところに時々行くくらいの距離感がほしいよなとか思う。

田中： それはありますね。

鈴木： 子どもでもそうだよ、あんまりべったりじゃなく、ちょっとした距離感がほしいよね。

田中： 確かに。

鈴木： 一番下の長男が中二なんだけど、嫁さんが凄く世話を焼くんだわ。「この子が大きくなっちゃったら、私なにやったらいいんだろう？」って。

田中： そこも距離感の違いっていうのを感じてらっしゃるんでしょうね。

鈴木： そう。仕事でも。嫌いじゃないからね、今の仕事。

田中： うん。

鈴木： もう家業だから。好きとか嫌いとかいうレベルで思ったことないじゃんね。これはやるべきことだって思ってるもんだから。

田中： DNA に入ってる感じですね。

鈴木： そうそうそう！ 家業だもん。必ず、これをやらないと家が成り立たない、というのが家業。まあ、そんなに長く続いているわけじゃないけど、よくあるじゃん。何代も続いた、何百年も続いたっていうの、そういう思いなんだろうね。

田中： そうですよ。それがあってあたりまえだし。

鈴木： そうそうそう！

田中： やるべきことだから、そこに疑問が入り込む余地がない感じ。

鈴木： そう！ これをなんでやってるのか？ じゃなくて、やることがあたりまえであって、やらないっていう選択肢が元々ないんだよね。うん。

..... つづく ^^

◆ 私にとってクリーニングは顧客に満足を得ていただく手法のひとつ

田中： その中で大切にしていることって、なんですか？

鈴木： どうなんだろう。あんまり深くは考えてないけど、正直好きも嫌いもないので。ただ、やれることとやれないことって、当然あるよね。さっきの話じゃないけど、人生60年だからさ。そのどこにウエイトを置くかっていうのがあって、ぼくは自分の生活というところに置いているじゃんね。で、その中に仕事、家族がどこに入ってくるっていうのがある。たしかに仕事はクリーニング屋だけど、やることはクリーニング屋じゃないと思うじゃんね。

田中： うん。なにを？

鈴木： 要はクリーニングっていうのは、あくまで手法なわけであって。お客さんに満足、お金を対価として払っただけの満足とか、そういったものを与えている手法がクリーニングなの。

田中： うんうん。

鈴木： ぼくはそう考えてる。だから、きれいにすればいいってもんじゃないじゃんね。だけどその中でうちの会社はどうなのかって。きれいな建屋の店とか、見かけではかなわない。そこは人となりでカバーしていったり。

また、小さいってことは決して弱みじゃないって思っていて、小さいってことがうちの強みと思っとるもんで。お客さんから預かったものが誰のものであるかってことを、しっかり把握してその人に合わせた仕事をするっていうのが、うちだから。だからメニューって基本的ない。基本料金はあるけど、メニューって基本ないじゃんね。

田中： ほお。

鈴木： 例えば、ワイシャツの糊ひとつにおいても、普通っていうののほかに、糊薄く、糊なし、糊やや強く、強くとか。すべてにおいて、そのひとつひとつを自分の把握できる範囲内で作業するから。だからその小さいってことが、うちのスケールメリット。

田中： 目が届きますね。

鈴木： そう。目が届く範囲の仕事をするから、スケールメリット。それをお客さんが使いやすい料金の範囲内でやる。それをすると正直儲からないんだけどね。手間や経費がかかるけども、単価は据え置きであるという。でも、ぼくはそれでいいと思っとるもんで。

それともうひとつ、それを補うための仕事というのがあるって、会社や法人関係の仕事だとか。新

たな分野でカーテンとか扱ってるんだけど、取り外しから取り付けまでやるっていう。お客さんは、洗うだけじゃなくてサービスで満足を得てるもんで。うちはドアツードアが基本で、店舗構えてないんだわ。だからカーテンも、予約制だけど、朝外して夜取り付けるとかね。あと、代替カーテンがほしいっていう人には用意したりとか。案外、カーテンってほつれたりするから、修理するとか。なるべくそういうことを心がけている。

田中：　すごい。

鈴木：　だけど、料金を高くしちゃうと利用しにくくなっちゃうじゃん。それを、お客さんが利用しやすい料金の範囲内でやって。それで、いつもバタバタしてて「なんか忙しくてー」っていうのが、好き（笑）

田中：　（笑）　自分で忙しくしてて、でもそういう自分が好き（笑）

鈴木：　そうそうそう！（笑）　だけど、さっきの話じゃないけど、なにからなにまでやっているとキリないから「これやとけよ、俺行くから〜」って感じだね（笑）　で、忙しくてもやりたいことがあると、夜中にガーって走ってって、やって帰ってくるとか。

田中：　優先順位が決まってらっしゃる感じですね。

鈴木：　あー。でもお客さんあってだからね。時々日曜日でも、どうしてもっていわれたらやるよ。でも、あらかじめ予定を入れといてくれないと、できない。自分の中で優先順位が決まっているから。人生、後10年しかないから。

田中：　まあ、それも思い込みだと思うんですけどね。

鈴木：　まあ、そうあってほしいな。後10年っていったら、淋しいよ。

．．．．． つづく　^^

◆ キャッチ&イートが大好き

田中： 今、なにが一番したいですか？

鈴木： なにがしたいかなあ。なにっていわれると困っちゃうね。

田中： じゃあ、どんなことで、ガーって走っていっちゃうんですか？

鈴木： ぼくは基本がアウトドアだからさ。アウトドアっていうと聞こえはいいけど、実際はちょっと違うんだよね。キャッチ&イートっていう（笑） まあ、狩りをするっていう感じなんだけど。

田中： 具体的にどんな？

鈴木： 山菜を採ったりだとか、潮干狩り、キノコ採ったり。

田中： うん。

鈴木： あと、魚を突いたりだとか。釣りはあんまりやらないんだよね。釣りはほら、町だから。町はあんまり好きじゃないんだよ。

田中： 町じゃないんですね。

鈴木： うん。で、素潜りして、サザエ採ったりだとかっていう感じ。それが大好きだもんで、それは譲れないんだわ。

田中： うんうん。えっと、それは、いつから？ 昔から？

鈴木： 昔から。気がついたらだね。物心がついた時から。

田中： さっき、雲を追いかけて行っちゃうって、いってましたもんね。

鈴木： そうそう。でも結構そういうのがあるんだろうね。行く先は町じゃないから。

田中： そっか。山とか、そんな感じですかもんね。

鈴木： そうそうそう。町も嫌いじゃないんだけどね。飲み歩きとかも好きで、この間も豊田の

あるイベントに行って4時くらいに終わったから、ちょっと飲み歩きしようって話になったんだけど。

田中： うん。

鈴木： 豊田ってさ、日曜日、お店ほんとに閉まってんだよね。

田中： 工場の町ですもんね。

鈴木： そう。休みでさ、はしごができなかったけど、そういうのが好きで。知らない町とか行って、勝手に「カリヤンナイト」しちゃう（笑） ワンドリンク、ワンフードで次の店に行っちゃう（笑）

注：「カリヤンナイト」とは、刈谷市の飲食店をワンドリンク、ワンフードでまわっていくイベントのこと

田中： あははは。

鈴木： そういうのが大好き。

田中： それって、ひとりで行かれたりするんですか？

鈴木： ううん、それは何人かで。ぼく、波があって、すごく仲良くする人がその時で変わったりするんだよね。で、今月末も行きたい人だけで行く企画をしたり。なんか、楽しみだなあ（笑）。

田中： あはは。

鈴木： 今日さっきまでそれをいろいろ話してた。そういうのを計画して、いろいろ話してるのが楽しいじゃんね。実際にやったら、大して面白くないかもしれんけど（笑）

田中： あははは。楽しいですよ。話がふくらんで。

鈴木： そう。そういうのが楽しいなあ。

田中： そうですね。さっき60歳でっていうお話もされてるんだけど、それから目を背けるためじゃなくて、ほんとに楽しんでいらっしゃる気がします。

鈴木： そうだね。たまたま今自分が住んでるところは、自分が買ったわけじゃないけど持家だしさ。それがあれば、とりあえず家族には責任果たせるじゃん。そう思うと、すっごい気が楽。

もう親父には感謝。そういうのもあるから、気が楽なんだろうね、きっと。なんにもなかったら、責任感じちゃうかもしれないけど。とりあえず、あんだけあればなんとかなるだろうって。仮にどっかで死んじゃっても。そんな感じだなあ。

田中：　すごく身軽な感じしますもん。

鈴木：　正論からいったら、仕事もどんどん拡大していかないかんと思うんだけど、そんだけのリスクを負うわけじゃん。そんなとこまで手えつけちゃったら、なんかあった時に困るだろうなって思うと、手をつけれん部分があって。だから、まあいいやって。気軽にやってって、あとは遺すもん遺しとけば、そんな困ることないだろうって。

田中：　なんか、人生、おまけ、みたいに聞こえちゃうんですけど。

鈴木：　そうだね、うん！　たぶん、おまけなんだろうな、きっと。考えてみたら、会社辞めた時にすでにおまけの人生に入っとるのかもしれないな。

田中：　あー、そうですね。

鈴木：　うん。

．．．．． つづく　^^

◆ 人付き合いの中で学ぶことがたくさんある

田中： でも会社を辞められてから、サラリーマンでは得られなかったものっていうのが。

鈴木： そうだね。サラリーマンはやっぱり、そうじゃない人もいるかもしれないけど、普通に会社の付き合いだけしてたら狭いね。だけど自分がそこにいたら、きっとわかんない。弟とか見ててそう思うな。地域の付き合いとか、やった方がいいなと思う。

田中： うん。なんか彩りが増える感じがします。そういう考えって、仕事の方にも反映してますか。

鈴木： 仕事にはそんなに反映してないね。だけど、なんていったらいいんだろう。いろんな考えに接すると、あといろんな人を見てるとさ、勉強になるなっていうのはあるじゃんね。一様に思うのは、みんな頭いいなって。話し方はもちろん「そういうふうに考えればいいんだ」とか、すげーなと思うもん。学ぶところ多いなって。遊び方でもさ、場の雰囲気や上手に盛り上げて「うまいなあ」って思うもんな。自分がやる気はないんだけどね。そういう立場になることもあるだろし。まあ、人生勉強だね。確かに。役に立つこと、活かせること。役に立つことを活かせるかどうかは難しいね。性格的なもんだね。面倒くさいから、ちょっとやめちゃうところも多いかも。

田中： そのやり方っていうのも、その人だからそういうやり方で出来ているのかもしれないし。

鈴木： それもあるかもしれないけど、そういう機会って、みんな平等にあるわけじゃん。そのものをいかに自分に取り入れて、活かしていくかっていうのは、その人の能力。自分はまだまだ未熟だと思うな。欲張りだな。未熟と思うなら、もっと頑張ればいいのに。上昇志向を持ってるんだけど、それを見せるのをよしとしてない、シャイな自分がある。たぶん年齢的なものもある気がするんだよね。30歳くらいの子だったら、もっとガツガツしてもいいと思うじゃんね。でも50歳の人間がそうしてたら、どうやって、ちょっと考えちゃう。自分でいかんと思うのは、与えられたものをちゃんとやるスピード感がないんだよね。

田中： 自分で、それをやらないといけないなって思ってる部分があるってこと？

鈴木： ある。迷っていて、なかなかやれないことがすごくたくさんあって。ただ、それを持ってるんだけど、それを置いといて違うことをいっぱいしちゃう自分も決して嫌いじゃないんだわ。やりたいことを押しつけてまで、やろうと思ってないじゃんね。優先順位ではわかっているんだけど、置いといて「好きなことやっちゃおう」って自分も決して嫌いじゃない。

田中： やらなきゃって気持ちをねじ込ませてまで、やりたいことをやってるわけじゃない。

鈴木： そうそう。あるスイッチが入って、これが面白いってなったら、そればっかやっちゃうんだわ。ガーって。営業とかもやってるんだけど、しない時はまったくしないんだけど「今日は営業しようかな」って日は、1軒行くと、ガーって10軒くらい行ったりとかね。行きはじめると、行けるんだわ。

田中： それはどうなんですか？ ご自分で。

鈴木： まあ、それは仕方ないかな。

田中： 仕方ない？

鈴木： うん。これは個性ってことで。

田中： 納得してる感じ？

鈴木： うん。納得してる。だけど、ある程度時間がないと動けないから、時間を作るように頑張らなきゃって思ってる。

田中： 鈴木さんにとって、時間を作るって、どういうことですか？

鈴木： うん、なかなか難しいところがあって。例えば自分がやってることを人に任せるってことも時間を作るってことじゃんね。なかなかやれない。時間を作れる自分と、作れない自分がある。作らんといかん時は作るじゃんね。その結果として、なんらかのマイナスが生じる。それを自分でやらずに、人を育ててやらせるようにする。それは正論かもしれんけどね、つまんないのよ。やっぱり。ぼくにとって、お客さんと接するということは、すごく大事。クリーニングって形がないじゃん。残らないし、着たら終わりだし。「ありがとう」だとか言ってもらえるのって、お客さんのところ行った時なんだよね。いかにそれをするかっていうところが、すごい快感があるのよ。トータルでサービスだから。ぼくのスタイルは、お客さんところ行って「ありがとうね！」って言われるようなサービスをして、それをぼくに言ってもらいたいじゃんね（笑）欲張りだよ、めっちゃめっちゃ。そういう自分があるからさ。

田中： 減らしたくない感じですね。

鈴木： 生涯個人店主かなあ。そこが家業っていわれるところなんだよね。家の仕事ってね、長

く続いたものを家業っていったところのあると思うんだけど……………ん……違うな。

田中： 違う？ なに？

鈴木： 家業は、例えば、お客さんところ行ったら、そのうちの家庭の事情が透けて見える。子どもが何人いて、奥さんが仕事してて、娘さんが大学だよってというのが家業な気がするんだよね。

田中： あー、密な感じ。

鈴木： そうそうそう！ やっぱり仕事だけじゃなくて、さっきカーテンとかいってたけど、カーテンをきれいにするっていうことは、施設の中では利用者さんの環境を整えたり、そこでのサービスの一環なわけじゃん。利用者さんと話したり、自分はそういったのも大事だと思ってるもんで。で、めちゃ好きなんだわ（笑）

田中： 鈴木さん、すごく人懐っこい感じがします。

鈴木： そう、そういうの大好き。やりたくてしかたのないこと。

田中： 納得してる感じですか？

鈴木： 納得してる。きっと忙しいのが好きなんだね。バタバタしてるのが。忙しくしてる自分がすごく好き。

田中： そうね。忙しい自分が好きなんですね。

鈴木： そう！ 大好きだと思う（笑）。

田中： だから、そういう自分を作ってるんですね。

鈴木： 要はナルシストなんだよね。分析すると、きっと。

田中： なんかおもしろいです。中二病で、雲追いかけていた子がそういう感じに。

鈴木： でも、そんなに変わってないと思うよ。

田中： 変わってない？

鈴木： うん。基本が子どもなんだよね。ほんと、思う。

田中： 笑

鈴木： 最近、細かいことで忙しくてさ、年度末で。幼稚園や小学校、そういうところが予算を一斉に使うもんで。何回か見積もりに行くと予算超えちゃうくらいの小さな金額なんだけどさ、そういう仕事するクリーニング屋さんがだんだん減って来てるんだよね。登録しなきゃいけないし、その登録にも費用かかるし、面倒くさいし、みんなやりたがらないんだよね。そうすると、必然的にやってるところにまわって来るじゃんね。見積もりだけで三回行くとかしてたら、人件費考えると全然赤字。でも、やれないって言えないしさ。で、行くとまた違う学校から電話かかってくるんだよね。ありがたいかありがたいかかってわかんない。けど、そういうところも、決して嫌じゃないじゃんね。

田中： よしとしてるんですよ。

鈴木： そうそう。儲からない、結局は（笑）。 ちょっと考えんといかんかな。お金があれば人間怒らないもんね。金持ちケンカせずっていうし。

田中： あれは、金持ちはケンカすると損が立つから、ケンカしないっていう意味だったよな……。ある精神科医の話だと、患者さんの割合をみた時、いわゆる年収の多い人と、少ない人の割合が同じだと聞いたことがあります。お金があってもなくても悩むという。

鈴木： そりゃそうだよ。確かにそうだね。ブータンって国あるじゃん。その国民総幸福度からいうと、いかにみんながしあわせに暮らせるかっていうことが、一番大事よね。

田中： うん。

鈴木： 携帯とか使用料を年間でみると、結構な金額になる。それだけ分のなにかを生み出してるかという、そんなことないもんね、考えてみると。PCとか家電とかさ、昔なかったけど、全然OKだった。便利になったけど、ほんとしあわせになったかっていうと……。

..... つづく ^^

◆私にとって幸せとは「求められる」こと

田中：鈴木さんにとってのしあわせってなんですか？

鈴木：それは、あれだよ。人から求められることだよ。

田中：求められること？

鈴木：うんうん、そう。人から「ありがとう」って言ってもらえること。それが人間の最大の存在感、意義だよ。人から求められること、それしかないと思う。と、あとは、自分がなにをすべきか。なにができたかってこと。その二つだと思うな。でも、あんまりそこは仕事の的には求めてないかな。

田中：そうですね。形ではない。

鈴木：そうだね。形ではない。ぼくの中では、形あるものでは人間は満足できないんじゃないかなあと思う。形あるものを求めていっちゃうと、身体とか縛られちゃう気がするなあ。

田中：縛られたくないんですね。

鈴木：そうだね。縛られちゃうのは好きじゃないね。

田中：そんな感じがします。

鈴木：だけど、自分が受ける、やるっていったものは、枠の中で精いっぱいやらずにちゃいけないっていうのは、自分の中にある。それは自分で理解してるもんで。

田中：そこでのバランスをとりながら。

鈴木：それについては、受けて以上はやらなくちゃいけないって。ただ、期限がないとつらいね。そういうものは期限があるからやれる。

田中：そうですね。ゴールが見えてると、踏ん張れる気がしますもんね。

鈴木：そうそうそう。最近の風潮でさ、役を受けたのにすぐ嫌だとか、途中でやめるとかやめんとかいう人がいるじゃん。ああいう人は大嫌い。自分が受けた以上は絶対やらんといかん。やめたかったら任期が終わってからやめればいい。途中は絶対ダメ。

田中： けじめなんですね。踏ん張るところはそこ。やれないなと思ったら最初から受けるなど。

鈴木： そうそうそう。まあ、諸事情いろいろあると思うけど。受けたらグズグズ言うなって。

田中： （笑）

鈴木： だから人に頼む時もそう。ほんとに頼みたかったら何回でもそこに行って頼む。その人って決めたら、その人のところに何回でも行けばいいんだよ。ダメならダメでいいし。

田中： うん。

鈴木： 案外、理想主義かもしれんね、意外と。だから挫折すると凄くへこむんだわ（笑）。

田中： 自分の中の完成型が見えてる感じ？

鈴木： いや、そんなことはないけど。全然見えてないけど。自分がやらないかんことは絶対やらないかんと思ってるので。自分で決めたことは弱いじゃんね、責任が自分だけだから。だけど、人から求められたことはやらないとね。そこは全体の迷惑になるじゃん。

田中： さっきの家業に近い気がします。

鈴木： うん。そうだよな。良く言えば責任感が強いということになるかもしれんけど、それとはちょっと違う気がするじゃんね。そういう形に、見栄にこだわってるのかな、自分が。やれんこともあるけど、受けたことはやるっていう。

田中： 矜持っていう言葉が浮かんできたんですけど。

鈴木： そういうわけでもないかなあ。なかなか自分の言葉っていうのがいい加減だからさ。よくころころ変わったりするけど、責任持たんといかんこと、あると思うじゃんね。そういう約束は守るっていう。そうするようにしてる。

田中： そういったとこ持ってないと、ずっといつまでも雲を追いかけて行っちゃうのかもしれないですね。

鈴木： そうかもね。

田中： 自分が時々雲を追いかけて行かないでいられるように、自分でしかけてる重石かも。

鈴木： いやあ、自分がそこにいるのは何のためか……。できなければ、いなければいいわけ。
いるならやるべきでしょって。

田中： 譲れないところなんですね。

..... つづく ^^

◆義務を果たしと責任を負うということ

鈴木： そう。そういうのが、やっぱり譲れないね。自分の中でちゃんとしなきゃってことだね。そこにいるっていう、立ち位置ってあるじゃん。それぞれの役はきちんとこなさなきゃいかん。それは、結構形にこだわるね。

田中： なんで？

鈴木： なんでだろ？？ 一般の義務もあるけど、役職っていうのは「やります」と引き受けた時点でそれに対する義務が発生する。そこが、「やります」と言った以上は、「やる」ってことにつながってるじゃんね。昔人間なのかな。

田中： そこに、なにか強いものがありますね。

鈴木： 確かに、強いものがあるかもしれないね。自分は組織というものを持ってないから、逆にそういうものの中ではしっかりしなきゃいけないなという意識が働いているのかも。年々そういうのが強くなってくるね。

田中： 役割として果たすことは果たすという。

鈴木： そうそうそう。たぶん、商工会議所の青年部っていう存在が大きかったと思うんだよね。自分も卒業するという年度が近づくとつれて、ちゃんとやって形を残さなくちゃいけないのかなっていう……。

田中： 今、それみてどうですか？

鈴木： いや、自分はそれでいいと思ってるよ。参加の仕方はいろいろあるけど、手を挙げて受けたら、そこには責任が発生する。その責任は果たさんといかんと思うけど。

田中： それは昔からあること？

鈴木： うーん。ぼくいろいろボランティアに参加したり、会を立ち上げたりしたこともあるんだけど、誰かが代表を務めんといかんし、いろんな役があるじゃんね。誰かにまとめ役を頼むんだけど、そこに責任が発生する……会全体に。自分の言葉に責任が発生するということ。言うならやれよって、それが基本なのかなあ、俺の中で。

田中： とても強いものですね。

鈴木： たぶん、長男だからね。

田中： 責任というものなのかもしれませんね。

鈴木： そういうふうで、ずっと来てたのかもしれないな。でもなるべく責任取りたくないんだよね。

田中： 責任の重さがわかってるからこそ、時々雲を見に行っちゃうのかもしれませんね。

鈴木： いや、多分そういう人なんだよ。よくわけのわからない。

田中： とても身軽な鈴木さんと、責任をガッツリ担いでる鈴木さんとがいる感じがしますね。

鈴木： 自分でも二面性あるわって思うもんね。言ってることがころころ変わるし（笑）

.....

つづく ^^

こちら、好奇心でかきだした質問表です^^

鈴木さんにもインタビュー後おつきあいいただきました。
まずはどうぞ、みなさんもたのしんでくださいませ★★

<いろいろ質問表>

- ・月並みですが、小さい頃はどんなこどもでしたか
- ・好きな本を一冊選んでください
- ・いつも必ずする「習慣」はありますか
- ・ねこ派ですか？いぬ派ですか
- ・今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか
- ・それのどの部分が大変だと感じたのでしょうか
- ・それをどうやって乗り越えたんですか
- ・その時、大切にしていたことは何ですか
- ・今頭の中にうかんでいる人はだれですか
- ・その人は、何か言っていますか
- ・3つ願いが叶うとしたら、何を願いますか
- ・人と会う時、つきあう時、その人のどんなところをみていますか
- ・人として、これは譲れないっしょ??っていうのがあったら、何ですか
- ・RPGでパーティを組むとしたら、どんなキャラクターを選びますか
- ・因みにそのなかで、あなたの役割（キャラ）はなんですか
- ・それはどんな冒険になるのでしょうか
- ・「攻め」と「守り」自分はどちらだと思えますか
- ・全く何の制約もないとしたら、何をしますか
- ・聞くとムカッってくる言葉ってありますか
- ・どんな時にイラッとしますか
- ・落ち込んだ時、どうやってリセットしていますか
- ・何をしている時が一番たのしいと感じますか
- ・今一番欲しいものは何ですか
- ・あなたの萌えポイントをおしえて下さい
- ・今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、2つ語って下さい
- ・そこで何に気付きましたか
- ・今の自分を突き動かしているものは、何だと思えますか
- ・今死んでも悔いはありませんか
- ・身体もお金も制限のない状態で、寿命が後一か月だとしたら、何をしますか

- ・世界に向けて演説をするとしたら、何を一番伝えたいですか
- ・生まれ変わったら、男と女、どちらがいいですか
- ・人間以外のものに生まれ変われるとしたら、なにがいいですか
- ・朝起きたら、雨が降っていました、どんなことを思いますか
- ・世界で何かひとつ完全に消滅させられるとしたら、なにを消し去りますか
- ・自分の性格を象徴するようなエピソードがあったら、おしえてください
- ・自分のキャラを一言でいうなら
- ・今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか
- ・今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください
- ・一年後、どんな自分にいるでしょうか
- ・最後に何か一言お願いします ^^

..... つづきは鈴木さんの

おこたえデス ^^

田中：いろいろ聞いてもいいですか？

鈴木：なに？

田中：好きな本はなんですか？

鈴木：好きな作家は「北方健三」

田中：ハードボイルド系？

鈴木：いや、時代物が好き。北方さんのハードボイルドは一冊も読んだことない。「破軍の星」が結構好き。あと、「剣客商売」とか、「鬼平犯科帳」を書いてる……。

田中：「池波正太郎」さん。

鈴木：そう、あの人。色っぽいのよ、本が。

田中：私も鬼平好きです。

鈴木：粋なんだよね、凄く。ああいう酒の飲み方とかしたいなと思うけどできない。

田中：かっちょいいですね。

鈴木：いいよね。あと、ファンタジー系も読むかな。「モモ」とか。「新世界より」も面白かった。「恒川光太郎」とか。本は結構好きで読むよ。だからぼくプレゼントはだいたい本だね。奥さんの誕生日、クリスマスには絶対贈るんだけど、ほとんど本だな。

田中：いつも必ずする「習慣」はありますか？

鈴木：ないね。そういうモノにとらわれんね。

田中：今までで一番大変だと感じた出来事（環境）はどんなこと（時）でしたか？

鈴木：子どもができて、産まれるまでかな。

田中：どんなふうに大変だったんですか？

鈴木： いや、責任感。嫁さんに対してはないじゃん。お互い納得して結婚してるわけだし。でも、子どもってというのは、そうじゃないところから生まれてくるわけじゃん。だから、異常なくらいに頭の中で、この子に対して責任があるんだっていう。だから、まったく嬉しくなかった。

田中： その責任の重さに。

鈴木： そうそうそう。その重さに潰されそうなくらい凄く苦しかった。生まれてくるその子に対して責任があるっていう。結婚する時も実はそうだったんだわ。結婚も責任が発生するわけじゃない。お互い納得してるんだけどさ、すごいマリッジブルー。

田中： あははは。

鈴木： 超マリッジブルー。

田中： 手かせ足かせじゃないんだけど、そういったものが乗っかるような。

鈴木： そう。結婚式の前日なんか、遅くまで飲んだね。「つれーんだわ」って、馴染みのお店で。永遠に続く責任って重いよね。

田中： そっか。ゴールが見えない。

鈴木： 一年、二年、十年とかゴールが見えれば頑張れるけど、永久にっていうのは、重くなって。できれば永遠は避けたいと常に思ってる。

田中： 身軽であるっていうことがすごい大事になってらっしゃるから。

鈴木： 大事！ 自分の中にあると思う。永遠の終わりは見たくないし、永遠は嫌い、だね、たぶん。だから区切りのあるところで、順番にいろんなことしていきたいっていうのがあるかのしれないね。

田中： そうですね。さっきの役割の話も、ひょっとしたらその期限内だから。

鈴木： そう！

田中： 期限決まってるから、できるでしょって。

鈴木： できるだろって。一年くらいやれるだろう？ 期限付きなんだからできるだろ？ っていう

。大人だもん。

田中： わかった。そこなんですね。きっと鈴木さんの中では期限というものがあるんでしょうね。

鈴木： あるんだろうね。あともうひとつ。楽しむっていうことは、時間を使うっていうこと。プロセスが楽しい。仕事の合理的な部分と、楽しむってことはある程度切り離さなくちゃ成り立たないと思っていて。でも、お客さんに喜んでもらうために、仕事で手間かけるということは合理的なことであって。で、自分の趣味の部分にもいくら時間かけても惜しくない。それはそれ自体が楽しいんだもんで。だけど仕事の部分はある程度合理的じゃないとならないっていうのもあるかな。ま、それも楽しめばいいんだけどね。

田中： うん。

鈴木： よく子どもみたいっていわれるけど、ずーっと子どもでいいと思ってる部分がある。もし世間が許してくれて、それで生きていけるなら。ずーっと子どもでいたいと思う。でも、時には人の話を「うん、そうか」っていえる人にもなりたいし。ようわからんね、自分でも。かなりね、相対的に考えてみると言ってることがAとB合っていない。ルーズなくせにこだわる部分があったり。

田中： とても人間っぽいですね。

鈴木： あー、人間っぽいってところはすごく人間っぽいだろうね。体制で見れば、反体制派だろうし。

田中： とても温度を感じますね。

鈴木： 暑苦しいくらい暑いのも考えものだけどね。不思議だよ、人間ってね。

．．．．． つづく ^^

田中：三つ願いが叶うとしたら、何を願いますか。

鈴木：まとまった休みが欲しいかな。今の仕事になってからとれてないからね。一ヶ月あったら放浪しちゃうね。放浪したいね。気の向くまま、そこに飽きたら出発とか。今の責任から解放されたら、そうしちゃうかもしれない。そういう暮らしがしたいね。停滞することが嫌いなんだね。ボーダーを設けることが嫌いだからね。

田中：人と会う時、つきあう時、その人のどんなところを見えていますか。

鈴木：難しいこと聞くなあ。女性なら、まず容姿でしょ。でも表情かな。いろんな気遣いとか。相手の人を思いやってくれる人。男もそうだよね。お互いに。思いやってくれる人か、どうか。それがないと表面的な付き合いになっちゃう。

田中：人として、これは譲れないでしょうというものがあるとしたら、何ですか。

鈴木：それ、難しい。う～ん。食事の時、音を立てる人とか苦手かも。あと、すぐお金の話する人もげんなりしちゃう。結構、理想主義者かも。あと自分の意見をゴリ押しする人。

田中：今の自分に大きな影響を与えたと思える出来事を、二つ語って下さい。

鈴木：難しいこと聞くね。やっぱ、結婚と子どもが産まれたこと。責任が生じた。う～ん。日々いろんなことでインパクトもらってて、本とかから受けてることもあるけど、限定できないし。あと、ひとつあげるとしたら、青年部に入ったということ。ちょっと、よいしょも兼ねて（笑）。ま、結婚、子どもかな。

田中：それまでフリーな感じだったのに、少し重さを感じるものが来たという。

鈴木：そうそうそう。そういうところに憧れてきたからね、自由とか。

田中：今の自分を突き動かしているものは、何だと思えますか。

鈴木：興味と責任

田中：何に対する興味ですか？

鈴木：自分の好きなものに対しての、飽くなき探求心。やりたいことはどんどんやりたい。責任っていうのは、社会、家族であったり。その二つだね。その興味がなくやったら、死んじゃうの

かなって思う。

田中：自分のキャラを一言でいうなら？

鈴木： そうだねえ。ミーアキャット……。

田中：ミーアキャット？ あの立ってるやつ？

鈴木： そう（笑） 砂漠で。太陽で身体あっためて。そこにいるだけでおもしろいし、かわいいじゃん。

田中：今一番大切に思っている事（もの）って、なんですか。

鈴木： やっぱ、家族。よめさん。

田中：今日のこの時間で、なにか気付いたことはあったらおしえてください。

鈴木： 実際に人から問われて話していると、改めて自分を見つめ直す機会になったのかなと。人って聞かれて自分の話をしようとする、自分を守ろうとする気持ちも当然あるから、必ずしもすべてのことが本心とは限らないというのもあるんだけど、今日はそれなりに自分の中で一通り思うことを話したと思うし。そうすると、意外に自分ってそういうこと思ってたんだなとか、ひとつ見つめ直す機会になったのかなって気がする。

田中： ありがとうございます。すごく少年の部分と老齢なところがあるような、常に相反するものが同じくらいの割合でいるような、そんな感じがしました。

鈴木： それは確かにあるね。

田中： 今日はお忙しいなか、ありがとうございました。

最後までお読みいただきましてありがとうございました。

今回、あなたの心の内側では、どのような気づきがありましたか。

少しでもみなさまのお役に立てましたら幸いです。

さて、私にはこのインタビュー記事の電子書籍出版のほかに、

『コーチング』という専門職の顔も持っています。

実は、今お読みになられたインタビューそのものも、このコーチングの考え方に則って行っています。

コーチングとは、人材開発のための手法のひとつで、

おもに対話によって相手の自己実現や目標達成を図る体系的な技術のことです。

相手の話を聴き、感じたことを伝えて承認し、相手に適切な質問をすることで、

クライアントの自発的な行動を促していくことができます。

日本にはいくつかのコーチングスクールがあります。私はCTIというコーチングスクール

でCPCC（Certified Professional Co-Active Coach）という国際資格を取得しています。現在、日本では約400名のコーチが、

このCPCCを取得しており、世界中では4,500人のコーチがこの資格を持って活躍しています。

また、『人間の脳の取り扱い説明書』とも称される実践心理学 『NLP（神経言語プログラム）』 も学び、

米国NLP協会認定トレーナーアソシエイトの国際資格も取得しています。

このNLPとコーチングはとても親和性が高く、相互に相乗効果を発揮して、クライアント様の変化変容、

目標実現に大きく寄与していると評価を頂戴しています。

その他、ソースワークショップトレーナーの資格も取得しており、クライアント様に

「本当に生き甲斐のある人生とは何か」を見定めていただくためのサポートもさせていただいております。

しばらく新規クライアント様の募集は諸事情によりおやすみをさせていただいておりましたが、

このたび、また新規クライアント様の募集を再開させていただくことになりました。

もし、少しでもご興味やご関心がおありでしたら、無料体験コーチングを受講なさってみませんか。

今なら1回60分のコーチングセッションを無料でお受けしております。

これまでも、たくさんの経営者様、事業家様、サラリーマンの方、もちろん主婦の方々までコーチングをさせていただきました。柔軟なアプローチと揺るぎない信頼関係。これが私のコーチングのスタイルです。

あなたの目標達成はもちろん、日常生活でのメンタル調整に、思考や判断の整理に、コーチングやNLPは素晴らしい効果を発揮します。私にあなたのサポートをさせていただけるのであれば、これに優る喜びはありません。あなたからのお問い合わせを心からお待ちしています。

無料コーチングセッション、その他のお問い合わせはお気軽にこちらから。

< ace-support@samba.ocn.ne.jp >

最後までお読みいただきましてまことにありがとうございました。

ハタラクヒトペディア電子出版

記者兼編集長 田中永子

ハタラクヒト＊ペディア 2 < 鈴木浩 氏 >

<http://p.booklog.jp/book/73467>

著者：田中永子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/24riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/73467>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/73467>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ